

地域在住独居高齢者におけるペット保有と健康関連指標との関連性

中村 一貴 (201211922, 健康増進学)

指導教員：大藏 倫博, 田中 喜代次

キーワード：独居高齢者, ペット, 健康関連指標

【目的】

高齢期は喪失体験を多く経験する時期である。喪失体験で抱えるストレスは、認知機能低下や抑うつ発症の要因であると考えられている (小澤ら, 1999)。近年、ペットが高齢者の心身の健康に良い影響を及ぼすという報告 (加藤, 1999) (有馬, 1996) が散見される。先行研究を概観すると、高齢者がペットを保有することは精神的健康感のみならず、身体的健康感にも寄与する可能性が伺える。しかし、その効果は世帯構成の影響を受ける可能性がある。そこで本研究の目的は、独居高齢者におけるペット保有と健康関連指標との関連性を横断的に検討することとした。

【方法】

対象者は平成 25 年に茨城県笠間市に在住する 65 歳以上の介護認定を受けていない者 16,870 名に実施した「いきいきチェックリスト」において有効回答が得られた 10,339 名とした。そのうち、仮説検証に必要な項目に欠損のある 2,642 名を除外し、7,697 名を分析対象者とした。世帯構成 (独居, 非独居高齢者) とペット保有を組み合わせた「独居高齢者+ペット無し」群, 「独居高齢者+猫保有」群, 「独居高齢者+犬保有」群, 「非独居高齢者」群の 4 つの群を設定した。基本属性の群間比較には、年齢は一元配置分散分析を、その他は χ^2 検定をおこなった。世帯構成とペット保有の組み合わせ 4 群と健康関連指標との関連性の検討には、ロジスティック回帰分析をおこなった。統計処理には SPSS ver. 22 を使用し、有意水準はいずれも 5%とした。

【結果と考察】

女性における世帯構成とペット保有の組み合わせと運動器機能との関連性は、「独居高齢者+犬保有」群は、「独居高齢者+ペットなし」群と比べ、運動器機能低下が生じている割合が有意に少なかった (オッズ比=0.30、95%信頼区間=0.11-0.81)。女性の独居高齢者の方がペットと遊ぶ傾向があり、ペットと遊ぶことで身体活動量のある程度確保できた可能性が示唆される。男女ともに世帯構成とペット保有の組み合わせと認知機能との関連性に有意な差は認め

られなかった。男性における世帯構成とペット保有の組み合わせと抑うつとの関連性は、「非独居高齢者」群は「独居高齢者+ペットなし」群と比べて、有意に抑うつを有する割合が低かった (オッズ比=0.54、95%信頼区間=0.40-0.72)。非独居高齢者は誰かと同居することで、孤独感や不安感が和らげられた可能性が示唆される。

【結論】

本研究では、地域在住独居高齢者におけるペット保有と健康関連指標 (運動器機能, 認知機能, 抑うつ) との関連性を明らかにすることを目的とした。その結果、女性の独居高齢者で犬を保有している人は運動器機能低下を有している割合が低いことが明らかとなった。また、男性は、非独居高齢者はペットを保有していない独居高齢者と比べ抑うつを有している割合が低いことが明らかとなった。

表 1 女性における運動器機能との関連性

	オッズ比 (95%信頼区間)	有意確率
独居高齢者でペットを飼育していない人	1.00	.114
独居高齢者で猫を飼育している人	1.12 (0.48 - 2.58)	.797
独居高齢者で犬を飼育している人	0.30 (0.11 - 0.81)	.017
非独居高齢者	0.99 (0.78 - 1.24)	.906

共変量：年齢, 経済状況, 関節痛・神経痛, BMI

表 2 男性における抑うつとの関連性

	オッズ比 (95%信頼区間)	有意確率
独居高齢者でペットを飼育していない人	1.00	.000
独居高齢者で猫を飼育している人	1.05 (0.29 - 3.73)	.944
独居高齢者で犬を飼育している人	0.81 (0.31 - 2.11)	.669
非独居高齢者	0.54 (0.40 - 0.72)	.000

共変量：年齢, 経済状況, 睡眠障害・不眠